

政務活動費 視察・研修会等 報告書

- | | | | |
|-----|-------|---|--|
| (1) | 日 | 時 | ： 令和4年8月9日(火) 10時30分 ~ 16時00分 |
| (2) | 訪 問 先 | ： | ・ 知覧市内（富屋旅館、旧武家屋敷群）
・ 知覧特攻平和記念館
〒897-0302 南九州市知覧町郡17881
・ 万世特攻平和記念館
〒897-1123 南さつま市加世田高橋1955-3 |
| (3) | 参 加 者 | ： | 公明クラブ（丹羽孝志） |
| (4) | 視察目的 | ： | 未来へと続く恒久平和への考察 |

◎視察内容

今回、南九州市知覧市内（富屋旅館、旧武家屋敷群、知覧特攻平和記念館）及び、南さつま市加世田高橋（万世特攻平和記念館）へ行き、恒久平和について考察する視察をしてまいりました。

その地は、第2次世界大戦末期、特攻隊という決死の任務を行う部隊として、平均年齢21歳の若者が、片道の燃料と爆弾を積んで飛び立っていった場所です。

その特攻隊とはどのようなものだったのか？また戦争とはどういうものだったのか？ということのを改めて考えていく機会とし、二度と悲惨な戦争を繰り返さない恒久平和を考察する機会といたしました。

南九州市知覧では、特攻隊員ゆかりの富屋食堂の見学と現存する富屋旅館への宿泊と旧武家屋敷群の見学、知覧特攻平和記念会館への入館。そして、南さつま市加世田高橋にある万世特攻平和記念館への入館でした。

◎知覧市内（富屋旅館、旧武家屋敷群）

特攻隊ゆかりの富屋旅館では、受付の従業員さんから、「特攻隊の母」と言われた先代女将・鳥濱トメさんのエピソードをお聞きいたしました。そして、現在の女将3代目・鳥濱初代さんからは、朝食前に先代のトメさんから引き継いだ、語り部として「特攻隊員さんたちの事をきちんと伝えたい」という思いをお聞きし、後継の語り部としての使命と覚悟を伺って参りました。

また、富屋旅館の近くには重伝建として保存されている旧武家屋敷群が存在

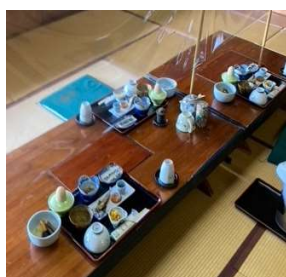
しており、現在も住居として使われている屋敷が数件あり、屋敷内には日本庭園もありました。

街並みは、南国漂う琉球文化と直線的な石作りや垣根が、南日本の風情を醸し出しておりました。

私は、こうした平和な風景とは対照的に特攻隊の基地がここには存在していて、悲痛な戦争の傷跡を残していることを思うと、戦争と平和は表裏一体であり、いつ何時、状況が一変するかもしれないという想いの中、事前学習や見聞した戦時下当時に思いをめぐらしました。



再現された富屋食堂



富屋旅館での朝食風景



南国漂う風景



旧武家屋敷群

◎知覧特攻平和記念館

本会館の開設紹介では、この知覧特攻平和記念館は、特攻隊という人類史上類を見ない命の尊さ・尊厳を無視した悲劇を忘れずに、再び戦争という悲劇を繰り返さないため、陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示し、隊員の当時の真の姿、遺品、記録を後世に残し、恒久の平和を祈念するために出撃基地の知覧にできた会館です。

そして、そもそも何故、特攻隊が生まれたのか？記念館によれば、特攻隊による特攻作戦に至る経緯として、圧倒的な物資戦闘力に勝る敵国を阻止する方法は、兵士一人一人の精神力を武器とした特攻戦法しか他に手段がないとの結論に達し、命をかけた特攻を重ねることで、敵国に大きな損害を与え、敵国に戦争を嫌がる気持ちが広がり、お互いに損害を出したくないから、そのうちに停戦なるのではないかと期待をしていたのだろう・と示されておりました。

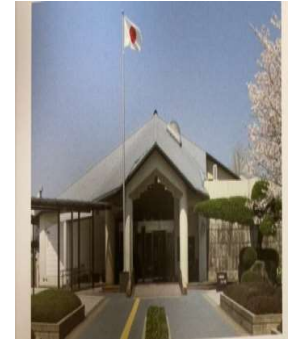
さて、案内図に従い、敷地内にある出撃するまで起居する三角兵舎を見学しながら、会館内に入りました。まず、零戦戦闘機の展示がなされ、その実物の迫力に圧倒されました。そして、関係展示物、1364人の隊員の顔写真・遺品・記録を見ていく中、一人ひとりの当時の心情など、かけがえのない人生の歴史を見ました。



案内図



出撃するまで起居する三角兵舎



会館の正面



展示されている零戦戦闘機



隊員 1036 人の当時の遺影



零戦と特攻有志の像
3 代目・鳥濱初代著書



「特攻隊の語り部」

見学を進めていく中、朝食の時に聞いた話の内容が蘇ってきました。
現在の富屋旅館 3 代目女将・鳥濱初代さんは、つぶさに生前「特攻隊の母」と言われている鳥濱トメさんの遺した言葉を「語り部」として伝えておりますが、「そもそも、特攻隊員は、無理やり特攻に行かされていたのか？」

そして、犠牲になったのか？」 彼らは各人一人ひとりの思いの中で「お役に立ちたい」「守りたいという一心だったのではないか?!」ということをお話されておりました。

また、「彼らは何故行かなければならなかったのか?」「どんな世の中を夢見ていらっしやったのか?」「そこに思いを馳せることが、今を生きる私たちの責務ではないかと・・・」とも話されておりました。

この事は、後日、読見した書籍（「なぜ若者たちは笑顔で旅立っていったのか」富屋旅館3代目・鳥濱初代著書）の中でも確認することが出来ました。そして、私は、この特攻隊の若者たちの気持ちをしっかりと、理解していきたいと思いました。

冒頭でも紹介いたしましたが、特攻作戦は、精神力を武器とした戦法しか他に手段がないとの結論に達した訳ですが、特攻隊員は、片道燃料と爆弾を積み込み、自らの命と一緒に自爆攻撃をするもので世界中でも類を見ない戦闘だった訳ですが、特攻隊の生き残り苗村七郎氏は、特攻隊員の若者たちには、この上なく純粋にして国を守る・守りたいという、“至純の心”があったということでした。“至純の心”については、私の思い及ぶところではありませんが、最後に述べてみたいと思います。



特攻隊員の思いを表した
至純の碑 建立した



世界の恒久平和を希って
知覧教育隊の碑

◎万世特攻平和記念館

この地にあった「万世飛行場」は、陸軍最後の特攻基地で、わずか4ヶ月しか使われていませんでしたが、201人の特攻隊員が祖国のために沖縄の空へと飛び立っていったところでした。

この跡地に、恒久の平和を祈念するよう建てられたのが、万世特攻平和記念館です。

館内には、吹上浜沖から引き揚げられた、日本にただ一機の「零式水上偵察機」や、死を間近に控えた隊員たちが肉親・愛する人達へ宛てた最期のメッセージ、“至純の心”を綴った「血書」、遺品、遺影などを多数展示しています。



万世特攻記念館外観



万世の地名にちなみ、「よろずよに」と刻まれている慰霊碑。



1階入り口付近



数々の展示品



日本でただ一機の
「海軍零式三座水上偵察機」

展示物の中には、特攻隊を出撃させ続けた司令官（大西瀧治郎）の遺書がありました。

司令官は、介錯を持たずに割腹自殺をし、数時間後に朽ち果てました。

その最後の遺書の内容には、この様に綴られておりました。「特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の和平の為 最善を盡くせよ」（特攻精神を忘れずに、日本国の福祉のため、世界の和平のために、つくしてください）と・・・

司令官の最後の思いとは、若者たちへの、「特攻精神（純粹なる国を思う至純という精神）は忘れず日本の福祉の為や世界が和み平らになるために尽くしてくださいという。」福祉や平和への行動を願い望むものでした。

これは、戦争とは対極的な内容であり、死を覚悟する中で、この戦争での過ちへの悔恨と、若者たちへの特攻精神（純粹なる国を思う至純という精神）によつての能動的な恒久平和推進への願望であつたと思われました。



子犬を抱いた少年兵



特攻隊の灯籠

◎ 参考になる点及び課題

最後に、“至純の心”について、出撃前の子犬と遊ぶ特攻隊員の写真は有名ですが、これは万世飛行場で映されたものであり、子犬を抱いた特攻隊員は、本市・桐生市出身の荒木幸雄さんであります。

荒木さんの周りにおどけた顔の隊員さんや子犬を優しく見つめる隊員さんたちの表情は、これから2時間後に特攻へ行くとは思えない、普通の日常の穏やかなひとときの写真のようであります。

この隊員さんたちの心を推し量ることができませんが、“至純の心”を持ち特攻へ行くこと=死を迎えることに対しては、もう自身の気持ちの整理や覚悟はなされており、それだからこそできる、平で穏やかな表情なのだろうと思いました。

特攻隊の遺族の皆様の中には、毎年必ず万世に来る人たちがいるとのこととです。

隊員達を忘れないために、知覧を始め万世には、一人ひとりの隊員さんの数だけ、灯籠があります。

至純を貫いた隊員さんたちの心を忘れないこと、永遠に特攻隊の“至純の心”を伝えていくことが恒久平和のためには必要なのだと思います。

現在、未来に残す戦争の記憶と言うことで、万世平和記念館では、「幻の特攻基地」を伝える語り部の方がいらっしゃいますが、その語り部のバトンが、最近、後継者に受け継がれました。

後継を受け継いだ学芸員の方は、後継の心が芽生えた理由として、特攻隊の「命令」の奥底にある隊員たちの「思い」に考えが及ぶ様になり、隊員が拒むことのできない「命令」に対し、隊員たちは、国=家族だと思わざるをおえなくなって、出撃して行かれたのではないか?!そして、そうした特攻に

対する多面的な見方やその深さを伝えることが、平和記念館の学芸員の使命だと認識するようになったことが理由だということです。

私が思うに、後継を決めた学芸員さんの 特攻隊の方々が持つ“至純の心”とは、国=家族への心であり、私が思う“至純の心”とは、少々一足飛びになってしまいますが、家族への心=平和の心だと思いました。家族一人ひとりの幸せを願う平和の心、特攻隊の“至純の心”の真意は平和の心になると思いました。

当時は、国が戦争のために若者の“至純の心”を利用しましたが、これからは真意である平和のために”至純の心”を持っていくべきだろうと思いました、

非常に難しいテーマで、私が論じることは、はばかりますが、この様に結論づけさせていただきました。

◎ 視察成果による当局への提言または要望等

遺族会と言う戦争を知っている世代の人たちが社会を司っている時は、平和は保たれると思われます。

そうした平和が保たれている時にこそ、恒久平和への準備をしていかなければならないと思っております。

遺族会の方々も限りある命であり、現在の遺族会の高齢化を考えると、戦争体験者の思いを知る、後継者を作ることは待ったなしの状態であります。

提言として、桐生市においては、現在、374人の遺族会の会員がいらっしやると伺っておりますが、この遺族会の身内の方々に注視し、後継者を育てる為の方策（戦没者追悼慰霊参拝式への参加など）を考えていくべきだと思っております。

また、要望として、様々な角度や人達からの「戦争や平和を語る講演会など」戦争を風化させない取り組みを行い、戦争の悲惨さ平和の尊さを一人ひとり思索する機会を、遺族会の身内の方々や若者に対して、より多く持つべきだと思いました。